

湖北の民家入門講座の開講デース！
先生は岐阜女子大学吉見静子教授。

今号の特集は「湖北の民家」。現在の生活も、まず伝統的な民家の力夕チと生活を知ることから豊かになるはず。

吉見先生の「湖北の民家礼讃」を読むと、今号は最後のページまで新鮮な発見がイッパイです。

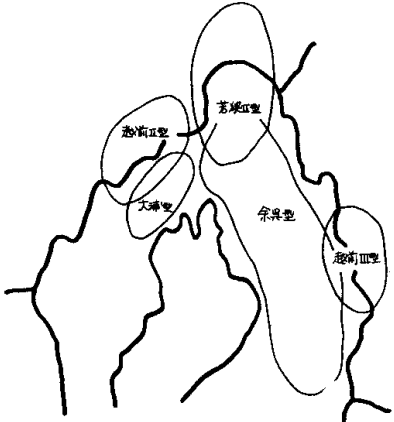


湖北の民家礼讃

民家に興味のある者にとって「湖北の民家」という言葉には心を騒がす一種独特の響きがある。雪に埋もれた穏やかな草葺の民家の群、日に輝く妻飾り、そこで営まれる四季折々の晴れやかな行事と慎ましい日々々の生活などが思い浮かぶ。

私のイメージの原型の一つは、幼い頃から聞いていた伝説や、かつて読んだ小説に描かれていた余呉湖の風景や湖北の町と村の有様であり、二つには鷺見の川の両岸に並ぶ民家や白い妻飾りの美しい写真であり、三つには民家研究の先学が調査研究された民家の数々である。それらがイメージの基底にある。いつかその美しい民家に出会いたいと願っていた。

はじめて、余呉町の民家調査に出かけたのは秋の最中であつた。役場のある中之郷を後に高時川を遡っていくと、山々は段々と色付き、田戸の集落につく頃には、まっ赤に紅葉していた。青い空の下山並みを背に、道路や川に沿って点在する自然と一体となった集落や、優しいが厳然とした民家の姿。葺き変えたのか白い妻飾りが日の光に映えて輝きを



増す。柿の木に残された艶やかな朱色の実いくつか……心にしみいる風景であつた。その後、滋賀の民家を調査する機会に恵まれ、漠然とはあるが、そこに住まいの本質があるという思いで、数多くの民家とそこに住む人々に出会ってきた。

各地の民家

湖北一带にはいわゆる余呉型民家が分布しているが、西浅井町の塩津街道を境にその西の地域には大浦型と越前II型が、福井県と接する余呉町の北部には若狭II型の類似型が、

岐阜県に隣接する伊吹町には越前II型の類似型などの、福井県と類似の民家がみられる。

(一) 余呉型民家

その特徴は、入母屋造草葺妻入で、妻飾りは、湖北の特徴といわれている(イ)麻葺や葦を並べ縄か竹で押さえた形式と、(ロ)菱形に茅の尻を浮き立たせた形式とがある。屋根葺材には、湖岸近くでは湖辺に生える葦や、山手では山の傾斜地に生える茅を用いている。平面構成は、土間のにわ、土座のだいどこ、板張のおくのま、などからなる三間取広間型である。にわとだいどこの境に建具はなく開放的で、天井はすこ天井、にわとだいどこの空間は一体的である。

土座の形式は、地面を九センチメートル程掘り込み、そこに十八センチメートル程の厚さに藁束や糠殻を入れ、その上にむしろを敷いている。このような形式は、大浦型や越前II型の民家にも見られ、冬期は大変暖かいとこのことである。小屋組は二本の丸太と梁とで三角形に組み合掌組である。架構は、にわとだいどこの境に、両側壁から半間入った位置に二本の太い上屋根柱を立て、その間に梁を架け、その梁に十字に交わるように桁行方向の梁を架けており、特徴的である。

土間は狭く、桁行方向に一間半から二間程度であり、地域によって床を張り出している。

例がある。なお、代表的な例として、長浜市国友町にあった、重要文化財の旧宮地家住宅がある。(現安土町近江風土記の丘)

(1) 菅並の民家

余呉型が一般的であるが、妻入だけでなく、平入も見られる。現在、にわのねま寄り半分にもゆかを張り出し、だいどこのねま寄りに切っていたいろりを、そこに移す例が多い。その時期は幕末から明治にかけてであり、養蚕を始めた頃と一致している。養蚕のための空間を広く取るためであろう。

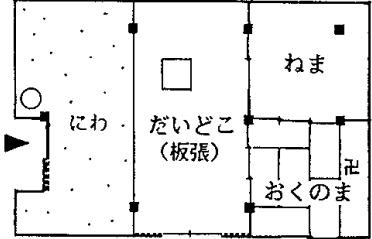
だいどこのねま側寄りの側面に、間口一間から一間半のとだなを置き、その上段の小さい引き違い戸の中に大黒柱を祀る風習がある。また、にわとだいどこの境にたつ二本の柱のうち、ねま側の柱を太くして大黒柱と呼ぶ。建物を支える柱に家の繁栄を託し、特に太い柱を用いるようになる。このように民俗的な信仰の依代は裏の空間にある。土に生きる人の魂の拠り所として、行事のある節々に清め、おまつりをする。

(2) 鷺見の集落と民家

集落は鷺見川の両岸に形成されている。茅葺民家の多くが妻面を川に向けて、北岸に十棟余、南岸に三棟が、規模もほとんど変わらず整然と並んでいる。さらに南の傾斜地と高時川沿いに数棟たっているが、現在多くの屋根はトタンで覆われてしまっているが、かつての美しい景観がしのばれる。この集落もいずれば高時川ダムに水没することである。

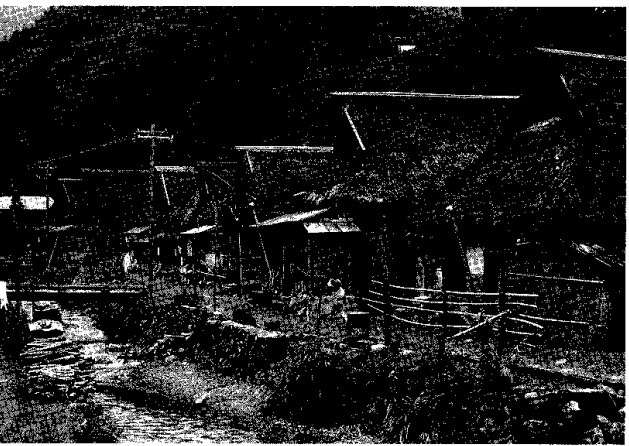


余呉町菅並の民家



余呉型(三間取広間型)

▼余呉町鷺見の集落、昭和52年頃の茅葺屋根の並ぶ風景

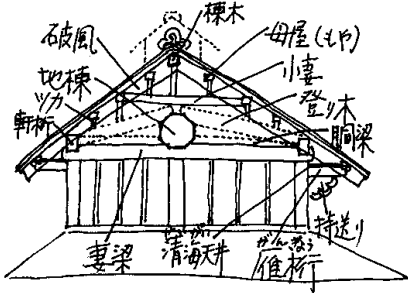
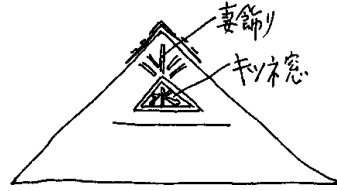


湖北の民家なせなど事典

これらの民家は入母屋造りで、①妻飾り（両横の三角の上）に葦を並べて縄か竹で押さえたり、菱形に茅の尻を浮き立たせたりしている ②三角部分をキツネ窓といい、そこに「水」の字を配したりしている ③間取りは田の字型で、三間取広間型が多く見られる ④住まいと畜舎は別になっていたが、住居を養蚕や菓仕事などの作業場としても使ってきた などの特徴があります。



①切妻屋根が多く、入母屋や寄せ棟が少ない ②柱にベンガラを塗る ③庇を受ける腕木でもある雁桁に檜材を用い、それに彫刻をほどこす。雁桁をさらに支える持送りを造ることも多い ④ささら天井（二階の床板裏を見せる天井）が多く、木目の美しさと光沢を競ってきた ⑤通し柱や鴨居（平物）には檜材を多く用い、その大きさを競ってきた ⑦間取りは田の字型が圧倒的に多い など。

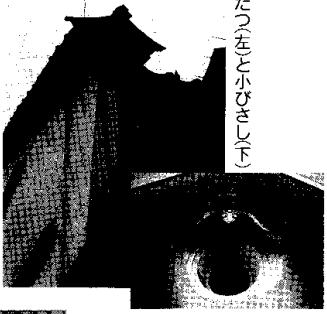


①狭い間口に軒を接しているので、切妻、平入りがほとんど ②二階の軒下の両側に袖壁がついている。隣家からの延焼を防ぐ役割をもっていたが、大正以降は町家の飾りとして付けられた ③通りに面した部分にさまざまな格子が付いている。二階の窓には虫籠窓のついた家もある ④むくり屋根といって、屋根の流れがふくらんでいる ⑤塗家造りの家では明かり取り窓に唐破風などの小びさしが付いている ⑥家の両側の壁を屋根より高く突き出して小屋根をつけた「うだつ」のある家も見られる。隣家からの延焼を防ぐのと

▼虫籠窓のある町家のたたずまい



うだつ(左)と小びさし(下)



家格を上げるためのもので、「うだつががある」は出世の代名詞 ⑦玄関から奥の坪庭まで通り庭が続いている など。

工の手間も少なくてすみ、経済的だそうです。妻壁の白壁と小妻とツカの組合わせとコントラストの美しさも見逃せません。

近畿地方にも北陸地方にもない湖北特有の工法です。「わからん。これが当たり前やと思てたけど、北陸の大江仲間聞いて湖北らしさをはじめ知った。積雪荷重に強さを増すための細工やろな」とは大工さんの話。

「魔除や。キツネ窓から火の粉が入ると葺きの家はガソリンにマッチの火をつけたように燃え上がる」とは大工さんの話。キツネ窓の内側、つまり「つし」と呼ばれる中二階は、屋根葺き材や風呂焚き用の燃料となる藁の格納庫とされ、よく乾燥した部屋でしたから火に弱く、備えに「水」の字を配したと言われ

ます。三角窓は換気窓でもあり、逆さにするとキツネの顔にも見えます。キツネは富をもたらす神獣とされ崇拝されたところから「キツネ窓」の名が出ているようです。瓦葺きの入母屋の家は「キツネ格子」になっています。鬼瓦の中にも「水」の文字が多く見られます。



「ほら、ためにええでや」と大工さんは言います。何百年という風雨、風雪を考えると、屋根の接合部分は瓦がずれたりして雨漏りしやすくなります。造作にも無理があり、積雪荷重には切妻が第一。その上、木材、瓦、大

▼両端が妻側に突き出した地棟は湖北特有の工法。



柱を立て桁組を終えた状態の空木建（からきだて）からきた言葉です。つまり、上棟（棟上げ）の作業がカラキダチと言われている

大黒柱と他の部分をつなぐ平物と呼ばれる大きな水平の部材（上敷居）が鴨居（カモイ）。両端の大きな枘（ほぞ）木材をつなぐ突起（カ）が鴨の首に似ているところからその名が出ています。

床の端に渡す化粧横木が框（かまち）。戸や障子のわくもカマチといいますが、「ごめんやす」と家へ入ったところの戸や障子を支える床の横柱が「上がりかまち」です。